

# 自らの生き方を考える力をはぐくむ進路指導の研究

- 学級活動における家庭や地域社会の人々とのかかわりを通して -

神埼町立神崎中学校 教諭 中島 達也

## 要 旨

進路指導では、変化の激しい社会を自らの意志と責任で、自らの生き方を選択していくことのできる能力や態度を育成していくことが求められている。そこで、本研究では、学級活動における家庭や地域社会の人々とのかかわりを通して、自らの生き方を考える力をはぐくむ進路指導の在り方を明らかにしていこうと考えた。手立てとして、生徒にとって身近な存在であり、大きな影響を与える家庭や地域社会の人々の様々な生き方や思い、考えに触れさせる場や、友達の考えや価値観を基に、共有化を図る場を設定した。その結果、進路に対する意識を高めることができ、自らの生き方を主体的に考えていこうとする意志や態度をはぐくむことができた。

<キーワード> 進路指導 生き方を考える力 学級活動 家庭や地域社会との連携

## 1 主題設定の理由

進路指導について、学習指導要領では、「生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」<sup>(1)</sup>と述べられており、正に生き方の教育としての進路指導の重要性が示されている。

しかし、進路指導を生き方の教育ととらえたとき、学校だけの力では、その果たせる役割は限られてくる。生徒たちの生き方にかかわって、大きな影響力をもつのが家庭や地域社会である。生活の場を共にしている身近な存在である人々にかかわり、その人たちの生き方や思い、考えに触れることは、自らの生き方を考えさせる一つの契機になったり、また、心を揺さぶられ、これからの前向きな生き方への意欲へと結び付いたりしていくのではないかと思われる。つまり、進路指導の目標を達成するためには、家庭や地域社会との連携が欠かせず、その教育力を引き出し、活用していくことが重要となる。しかし、本校の実態を振り返ってみると、いろいろな学校教育活動において、サポートとしての協力はいただいているが、具体的な指導の場や活動の場において、その教育力をまだ十分に生かしきれていない。

そこで、家庭や地域社会と連携を図り、その教育力を生かし、人々の生き方や思い、考えに触れる場を、意図的・計画的に設け、学級活動を核とした進路指導の充実を図っていけば、生徒たちの自己実現への意欲を高めることができ、自らの生き方を考える力をはぐくむことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

## 2 研究の目標

地域の教育力を生かし、家庭や地域社会との連携を通して、自己実現への意欲を高め、自らの生き方を主体的に考えようとする力をはぐくむための進路指導の在り方を探る。

## 3 研究の仮説

学級活動において、家庭や地域社会と連携を図り、次のような手立てを取れば、進路に関する意識を高めることができ、よりよい自己実現に向けて、自らの生き方を主体的に考えていこうとする態度を育てることができるであろう。

家庭や地域社会の人々の様々な生き方や思い，考えに触れさせる。

家庭や地域社会の人々に積極的にかかわっていけるように，知りたい・探りたいという課題意識をもたせる。

話し合い活動や意見交換を通して，友達の考えや価値観に触れさせ，共感する考えに出会わせたり，自分の考えや価値観と比較させたりする。

振り返りの活動を通して，今の自分を振り返らせるとともに，こうありたいという自分像を描かせる。

#### 4 研究の内容と方法

##### (1) 研究の内容

ア 進路指導についての理論研究及び家庭や地域社会との連携についての先行事例の研究

イ 地域の教育力の一つである人材の発掘

ウ 検証授業（1年生「働く人びとに学ぶ」）を通しての仮説の検証

##### (2) 研究の方法

ア 文献や資料を基に進路指導についての理論研究及び家庭や地域社会との連携に関する先行実践事例を調査する。

イ 地域人材を発掘し，地域人材バンクリストを作成する。

ウ 検証授業の実践と分析及び考察を行い，仮説の有効性を検証する。

エ 研究をまとめ，成果と今後の課題を明らかにする。

#### 5 研究の実際

##### (1) 生き方を考える力

進路指導の目指すところは，生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択していくことであるが，この主体的に進路を選択するということは，自己実現を図る上では最終的な段階であり，いろいろな構成要素の積み重ねの上にあると考える。

本研究では，その構成要素を，次の3つと考え，これらをはぐくんでいくことにより，生き方を考える力をはぐくんでいきたいと考えた。

自己を生かし，人間として，また，自分としてどのように生きていくべきかを考えようとする意志  
これからの自分の在り方を自らの意志と責任で選択していく能力  
実現を目指していこうとする態度

##### (2) 生徒の実態把握

本校生徒の進路に関する意識実態調査より，次のような課題が見えてきた。

自分の将来についての関心が低い。  
将来のとらえ方が，中学校卒業時という狭く限定的なとらえ方となっている。  
上級学校への進学に当たり，進学する目的を見いだせないまま進学を希望している。  
卒業時の進路選択が，将来の見通しをもったものになっていない。  
学力によって，高校を選択している生徒が多い。  
十分な職業観がはぐくまれていない。  
個性や適性についてなど，自己理解が図られていない。

これらの課題の解決のために，1つずつ具体的な手立てを取って解決を図っていく必要があるが，その根底にある課題は，自分の将来についての関心が低いということではないだろうか（次頁図1）。からまでを解決しようとする場合，結局は主体となる者の将来についての関心という情意面にかかるところが大きい。「自分の将来についての関心が低い」ということは，言い換えると，「自分としてど

のように生きていくべきかを考えようとする意志が働いていない」ということである。つまり、自らの生き方を考える力が身に付いていないということであり、この力をはぐくんでいくことが必要であると考えた。また、特にその出発点にあるのが、意志やそれに基づく態度であることから、本研究では、この意志やその実現を目指していこうとする態度をはぐくむことに取り組むこととした。

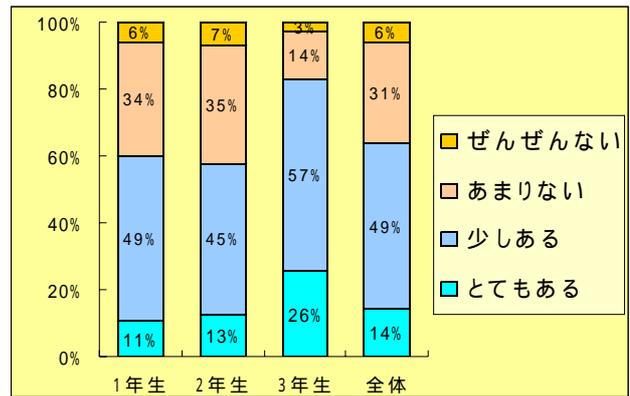


図1 自分の将来について考えることがあるか

(3) 研究の全体構想

学級活動において、知りたい・探りたいという課題意識をもたせ、家庭や地域社会の人々の様々な生き方や思い、考えに触れさせる活動を取り入れる。さらに、友達の考えや価値観に触れさせることによって共有化を図り、自分の考えと共感させたり、比較させることによって考えを深めさせたり、新たな価値観に出会わせたりする。そして、振り返りを通して、自らの生き方や価値観を今一度自分に問わせ、新たな方向を模索させたいと考えている。生徒たちは、大きな影響を与えるであろう人々の生き方や思い、考えに触れることによって、心を揺さぶられ、これからの進路に対する意識を高めることができるのではないかと考える。

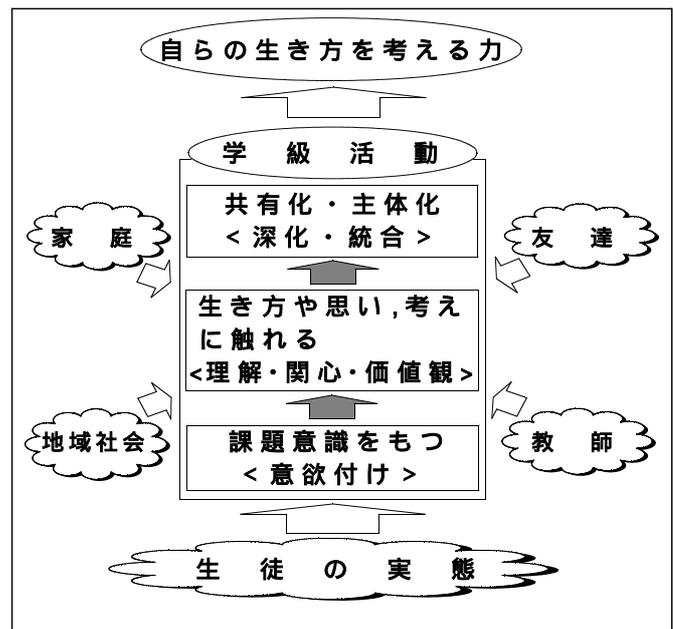


図2 研究の全体構想

いかと思われる。つまり、前向きに生きることへの意欲が生まれ、どのように生きていくべきかを考えようとする意志やその実現を目指そうとする態度がはぐくまれるのではないかと考える。そして、それが、自らの生き方を考える力となっていくと考える(図2)。

(4) 実践化への手立て

ア 課題意識をもたせる

かかわる人から何を知りたいのか、探りたいのかという課題意識を掘り起こさせ、その人に触れる必然性や必要性をもたせたい。そうすることによって、課題意識が明確になり、生徒たちは、積極的にかかわっていこうとするのではないかと考える。

イ 家庭や地域社会の人々の生き方や思い、考えに触れさせる

生き方や思い、考えに触れることで、自らの生き方を考える一つの契機になったり、また、心を揺さぶられ、これからの前向きな生き方への意欲へと結び付いたりしていくのではないかと考える。今回の検証授業では、地域社会からゲストティーチャーという形で、直接授業に参加してもらった。また、家庭については、親や家族に家でインタビューを行うという形で、触れる場を設定した。

ウ 共有化を図る(友達の考えや価値観に触れさせる)

家庭や地域社会の人々の生き方や思い、考えに触れた上で、友達の考えや価値観を基に共有化を図る場を設定する。自分の考えと共感させたり、比較させることによって、考えを深めたり、新たな価値観に出会ったりするのではないかと考える。

エ 主体化を図る（自分のこととしてとらえ直させる）

最後は、自分のこととしてとらえ直し、生き方への統合を図らせる。これまで出会った共感する生き方や考え、新たに見いだした価値観などをもう一度自分に問わせ、今の自分を振り返らせるとともに、これからの自分像を描かせる。そうすることによって、主体的に自らの生き方を考え、これからの方向性を明確にすることができるのではないかと考える。

(5) 地域人材バンクリストの作成

家庭や地域社会のもつすばらしい教育力を積極的に活用していくために、地域人材バンクリストの作成の必要性を感じた。そこで、生徒を通じ、保護者の方々に学校支援人材バンクに登録してもらい、人材の発掘を進めた（図3）。しかしながら、数としてもまだまだ集まっておらず、継続して進めている途中である。募集する枠を広げていくことも考えているが、町の方でも来年度より「神埼町体験活動・ボランティア活動支援センター」の設置が決まり、ボランティアコー

学校支援人材バンク登録申請書			
氏名	性別	年齢	申請書
住所	〒0952-531		
電話番号	0952-531-		
支援内容	陶芸もしているので、実際にロクロや実機を手伝って指導ができれば、又、焼物屋の仕上げや、お茶の淹れもできれば。		
説明	陶芸の仕事をしていますので、仕事の頑ななことができます。料理が得意なので、家庭科の授業で一緒にできる。陶芸を継続しているので、当時の生活などに合わせて講義ができる。ボランティア経験者です。陶芸をしていますが、実際に見せることができます。		
支援内容に 関する上 の資格・学 歴・職歴 等詳細事項	日本工芸会正会員 皇陶芸協会会員		
活動時間	土、日を除く週中、昼間は可能です。		
連絡先 の住所	電話番号	0952-531-	
郵便番号	0952	ホームページアドレス	
お問い合わせ先 神埼町立神埼中学校 電話			

図3 学校支援人材バンク登録申請書

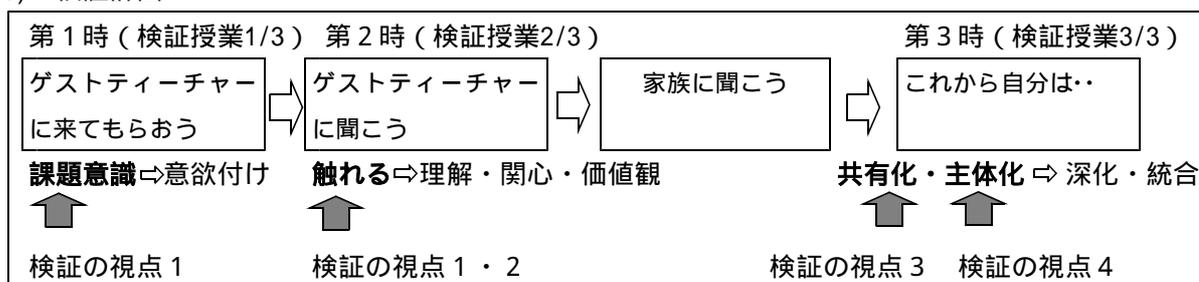
ディネーターも置かれるようになった。業務内容としては、体験活動やボランティア活動等にかかわる情報収集や場の開拓、人材の確保及び登録リストの整備などを行うということである。学校の教育活動に対しても、情報の提供を行いたいという意向であり、連携を取りながら進めていきたいと考えている。

(6) 授業の実践と考察

ア 検証授業

(ア) 単元 「働く人びとに学ぶ」

(イ) 検証計画



イ 検証授業の考察

(ア) 視点1 知りたい・探りたいという課題意識をもつことによって、活動意欲の高まりが見られたか。

生徒たちは、自分の生活とのかかわりの中で、職業というものをとらえることができ、ゲストティーチャーから話を聞くことの必要性を感じることができているようであった。そのため、聞いてみたいという質問の数も、かなりの数になった。また、34名（94%）の生徒が、ゲストティーチャーに来ていただく授業が楽しみとしており、積極的にかかわっていかうとする意欲の高まりが見られた。今回は、ゲストティーチャーの方が生徒たちにとって身近な職業に従事されている方であり、直接かかわるという授業形態を取ること、生徒たちの意欲を高める原因となっていた。

実際にゲストティーチャーに来てもらった授業でも、34名（94%）の生徒たちが、聞きたいと思っていたことや知りたいことが解決できたとしており、課題意識の明確化がなされていたため、知

りたいことを学ぶという姿勢で、ゲストティーチャーに積極的にかかわっていく姿がうかがえた。

- (イ) 視点2 家庭や地域社会の人々の生き方や思い、考えに触れることは、これからの進路に対する意識を高めるのに有効であったか。

ゲストティーチャーの生き方や思い、考えに触れる中で、33名(92%)の生徒が、「これからの生活の中で自分に生かしていきたい話や言葉があった」と答えている。また、35名(97%)が、進路の学習で、ゲストティーチャーに来てもらうことに関して、「よい」という肯定的な回答をしている。その理由からは、ゲストティーチャーに直接触れることで、職業に対する理解を深めたり、自らの生き方を考えたりする機会となっていることがうかがえた。

また、家族の考えや意見を聞くことについては、学級の生徒全員が役に立ったという肯定的な回答をしている。生徒の感想には、表1のように、自分のこれからの生き方に結び付けた感想や自分なりの職業観を含めた感想が多数見られ、進路への関心の高まりがうかがえた。家族の意見が生徒たちに与える影響力というのはやはり計り知れない。

表1 生徒の感想

・自分のやりたい仕事を早く見付けようと思った。 ・自分の個性というのがよく分からないけど、その個性を生かしていけたらと思った。 ・働くことは大変だけど、働く中での楽しみもたくさんあるんだなと思った。 ・何事もあきらめないでやることだと、お母さんと話して感じた。

- (ウ) 視点3 友達の考えや価値観に触れ、共感したり、比較することによって、自分の考えを深めたり、新たな価値観を見いだしたりすることができたか。

33名(92%)が、友達の考えや意見を聞くことは、役に立つとしており、生徒の感想(表2)からも、友達の多様な考えや価値観に出会うことにより、自分の考えと比較し、共感したり、深めたりしている様子が見られた。

表2 生徒の感想

・自分の考えが、他の人の考えと一緒にあったから、何となく嬉しかった。 ・私が考えたこともない考えが聞けて良かった。 ・自分に役立てようと思うものがあった。

例えば、図4のように、友達の考えを聞くまでは、職業にだけしか目が向いていなかった生徒が、友達の考えを聞いて自分がやりたい職業と高校とを結び付けて考えるようになった。

・やりたい職業に就くことが大切。

↓ (出会う)

少しずつ自分に合った仕事を考えていき、そこから高校も考えていくことが必要。

↓ (補強)

・本当に自分がやりたい職業を考え、それを基に、高校を選んでいくことが大切。

図4 ワークシートの内容

- (I) 視点4 こうありたいという自分像を描くことにより、自分の生き方を自分に問い、これからの方向性を明確にすることができたか。

33名(92%)が、これからの自分について、どうありたいか考えることができたとしており、ワークシート(表3)からも、これからの生き方につながる意欲が感じられた。最後に自分のこととしてとらえ直し、これからの自分像を描くことによって主体化を図り、自分のこれからの方向性を明確にしていた。つまり、どのように生きていくべきかを考えようとする意志や実現を目指そうとする態度がうかがえた。

表3 ワークシートの内容

・自分が何が得意なのか見付ける。 ・苦手なことから逃げないようにする。 ・今やりたい仕事などは、まだ見付けていないけれど、自分の個性が生かせて、やりがいのある仕事を見付けていきます。 ・看護師目指して、勉強をがんばる。 ・保育士になるぞ。

(7) 検証授業の全体考察(事前と事後のアンケート調査より)

授業後、32名(89%)が、自分の将来について考えることがあるとしている(図5)。また、自分がどんな職業に向いているか考えたことがあるとした生徒は、授業前に比べ、12名増え、24名(67%)になった。さらに、自分の将来について調べてみたいことがあるという生徒は、授業前においては、13名(36%)であったが、授業後には26名(72%)に増えた(図6)。調べてみたいことがあるということは、自分の将来についての興味や関心が生まれてきたということである。調べてみたい内容についても、「就きたい職業の内容」「就くまでの道すじについて」「自分の適性について」と答えた生徒の人数が増えており、自分を見つめ、自分のよさを生かしながら、これからの生き方を探っていこうとする姿がうかがえた。授業を通して、家庭や地域社会の人々の生き方や思い、考えに触れ、刺激を受け、生徒たちは自分の将来についての意識をもつようになった。身近な人々に触れることが、その一つの機会となり、前向きに生きることへの意欲につながった。そして、自分としてどのように生きていくべきかを考えようとする意志をもち始めたと言える。

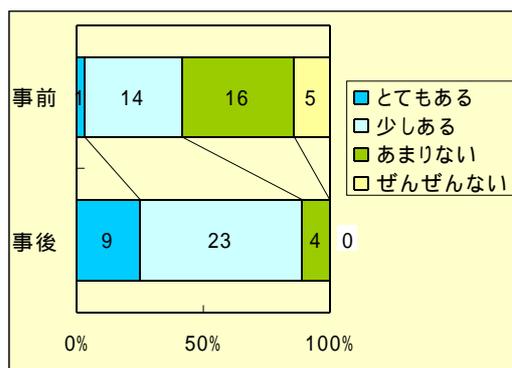


図5 将来について考えることがあるか

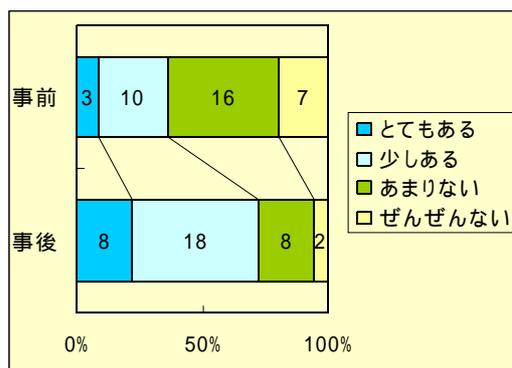


図6 将来について調べてみたいことがあるか

6 研究のまとめと課題

(1) 研究のまとめ

- ア 身近な存在である家庭や地域社会の人々の生き方や思い、考えに触れることで、心を揺さぶられ、進路に対する意識を高めることができ、前向きな生き方への意欲に結び付いた。また、よりよい自己実現に向けて、自らの生き方を主体的に考えていこうとする意志や態度をはぐくむことができた。
- イ 家庭や地域社会の人々の生き方や思い、考えに触れる中で、その人をモデルとしながら、望ましい職業観をはぐくむことができた。
- ウ 直に触れ合うことは、本物に触れることであり、身近な人であるだけに、「親近感があり、刺激を受けやすい」「説得力が大きい」「必要に応じて再接触ができる」などの点で、効果がある。
- エ 家庭や地域社会の人々の生き方や思い、考えに触れ、更に友達との共有化を図る場を設定したことで、多様な考えや価値観を知り、それを基にして自分の考えを見直すことができ、一人一人の考えの深まりが見られた。

(2) 今後の課題

- ア 家庭や地域社会との連携を位置付けた進路指導年間指導計画の作成
- イ 総合的な学習の時間と進路指導との関連についての研究
- ウ 主体的に進路を選択するための能力についての研究
- エ 家庭や地域社会と相互理解を深める方法の研究
- オ 地域人材の発掘と人材バンクリストの作成

《引用文献》

- (1) 文部省 『中学校学習指導要領解説特別活動編』 平成11年 ぎょうせい p.119